

火星



平成20年9月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

兄の忌の夜は真青なる雲の峰

鶉匠きて滄搔き出せる午前かな

八朔の雨降る一乗下り松

月白の竹幹に猫身を擦りし

月白のかぼちや畑に人の声
椅子の上に逆さまの椅子きりぎりす
ゲレンデの風走りくる吾亦紅
白桃の刃を入るところなし
夜目利いてきたる高みの榎櫃の実
二人出て豈豆畑を倒しをり

太白星

柳生千枝子

青嵐深き呼吸を験したり
額の花漸く彩の濃くなりし
昏れ急ぐ花とも思ふ濃あぢさゐ
のびやかに天空を航く秋の雲
菊ひらく香りを運ぶ風やさし
小菊みなひらき香りのそれぞれに
夕落暉菊の香りのひろごれり

杉浦典子

枝下しの梯子に風の湿りきし
梅雨茸の火いろの傘の朽ちゆける

酔ざましに出でて石榴の花の下
熱帯魚と亀に留守の灯点し来し
夕映の山へ田植機向き変ふる
引き汐の浜に鶏ゐる昼寝覚
蔵の扉に日の移ろへり柿の花

浜口高子

魚の腹あらふ溪川青葉冷
エンジンの地にひびきゐる三尺寝
太閤ぎらひや鱧皮に酔を利かせ
庭に水たつぷり打ちし触れ太鼓
平手叩きに昼寝顔起ききたり
暮れがてを集ふ男の祭足袋
噴煙なき今日の浅間や籠枕

火星作品

山尾玉藻選

昼寝より覚めて独り身かと思ふ
明石 戸栗末廣

梅干してその夜の星のおびただし

退るとも対ふとも見え蝮の子

方丈の裏の茗荷の子 沢山

林中のそれも木の家 明易し

風やんで昼くらくなるきりぎりす
京都 白数康弘

川上の水濁りをりみなし 栗

水飲んで二百十日の犬と猫

叱られてばかりぬる婆大根 蒔く

切支丹燈籠が寺につづれさせ

うつむける百合の蕾のこはかりし
大和郡山 城 孝子

ほうたるに撓む水音草の音

謙信の地なる夏蚕の重たかり

東京へ夫が電話す星祭
夕ひぐらし煙草止めたる夫とゐる
幼子の臍冷えてきし螢狩
百歳の母の舐めたる麦焦がし
白玉や兄の繰り言やはらかし
夏炬して西行庵の遠からず
峯入や宿の厨のただならぬ
激つ瀬に声流さる山法師
御旅所の井戸に雨降る男山
遷宮の今年空梅雨かも知れぬ
一面の青蔦に向くオムライス
鶏つれて鳥屋掃いてをり日雷
茶袋のやうな梅雨茸蹴りにけり
杣小屋に飯炊く匂ひ梅雨茸
消防署の朝の点呼やつばめの子
牛蛙都會の人の鳴きにけり
梅雨明や天王の寺さんの亀の甲

神戸 深澤 鱻

八幡 大山 文子

大和郡山 吉田 康子

選のあとに

山尾 玉藻

こころの襞にまたひとつ翳りが生まれることだろう。へ叱られてばかりゐる婆大根蒔くは、人としての業の深さや悲しさをさりげなく言い得ており、非常に印象的な作品である。

ほうたるに撓む水音草の音 城 孝子

退るとも対ふとも見え蝮の子 戸栗 末廣
たとえ子供であつても蝮は蝮、迂闊に侮つてはひどい目にあう。「退るとも対ふとも見え」は蝮の子の描写ではあるが、実は「蝮の子」と出くわしてしまった作者の困惑ふりが包み隠されている表現でもあつて、なかなか面白い。同時発表作〈昼寝より覚めて独り身かと思ふ〉には、男性特有のペーソスがそこはかとなく漂っている。

風やんで昼くらくなるきりぎりす 白数 康弘

「秋陰」や「秋意」の如く、秋の季語にはところが微妙に感応して成ったものが多くある。「風やんで昼くらくなる」には、「秋陰」ほどのうっとうしさは感じられないが、「秋意」とも言える愁いを感じられる。草々もはたと静かになり、それに応えて「きりぎりす」がゆつくりと鳴きはじめ、作者の

螢川の闇が濃くなる頃、作者は、せせらぎと足元の草がこれまでとは違った音を立て始めたように感じたのである。それが「ほうたるに撓む」であり、螢が触れるたびに水や草がしなやかになり、自ずとその音も柔らかくなつたとする、詩人らしい感覚が生んだ表現なのである。螢を詠む場合に「水音」をモチーフにするのはごく一般的だが、「草の音」にまで触覚を伸ばした点も、また詩人らしい。

百歳の母の舐めたる麦焦がし 深澤 鱗

作者の奥さまの母上は百歳となられ、お目出度い限りである。母上は昔ながらの「麦焦がし」がお気に入りなのだろう。「舐めたる」の生の表現に実体感があり、流石に百歳らしい落ちつきぶりが窺える。その点、幼い頃から粗忽者の私は、「麦焦がし」に噓せてなんども苦し涙を流した。(以下略)

恒星圈

戸田春月

ででむしの角天国と交信中
算鳴る午後をたつぷり鴨足草
蜜豆やスプーンの裏に顔映り
スカーフに四隅ありけり青嵐
蛇の衣風に吹かれて銀の音

田中みのも

長屋璃子

あぢさゐや我もこの世に七変化
昼寝して囲碁の定跡たしかめむ
図書館の休日なりしぽんかづら
そのひぐさにバスの形の花壇かな
尼寺の門守る蟻の巨きかり

職人のタオルまつさら夏至の朝
人の眼の螢火のごと光りけり
緑蔭を抜けきし風の染まりをり
片蔭に先客として猫ありぬ
佛頭の渦巻いくつ梅雨深む

戸栗末廣

野澤あき

浦人の遠まなざしに梅雨の情
水の香と闇の香のある螢狩
青梅を幼なごころに齧りけり
麦笛を吹くとき父の真顔なる
蝮見る首の手拭握りしめ

子も夫も先に死なせし半夏雨
合歓の花まだまだ夕日の、こりをり
卯の花や能勢街道の崖づたひ
あぢさゐや新聞配達濡れてくる
初蟬の夕べ亡き子の夢を見し

獅子座

山尾玉藻推薦

岩井ひろこ

日雷鍵穴ゆるき勝手口
羽抜鶏音楽室の窓の下
雲の峰競争馬の放たれし
山門の閉ざさる泰山木の花

緒方佳子

方丈の上り框の梅酒瓶
帽脱いで空の浮巢を掬ひけり
流し台ぼこんと鳴れり日の盛
栗咲くや大きな文字の招待状

白数康弘

水音のして月白の札所寺
月天心波が渚の石攫ふ
海彦が天橋渡りある良夜
傘立に傘が一本雨月かな

藤原冬人

剃りあげし頤を撫づる南風
巴里祭古伊万里あをき海のいろ
モンローにほくろのありし昼寝覚
うなづける磁石の針や梅雨の真夜

藤田素子

六月の漆器の赤の持ち重り
あめんばう重心すこしずらしたる
梅雨寒の工業高校灯りをり
夏至の夜のバナナの匂ひ満ちてきし

竹内水穂

土埃残してゆきし遠足子
花椎の降る白洲家の屋根庇
四阿に風よく通る合歡の花
梅雨夕焼奥能登見ゆる寺にゐる

中村斉子

梅雨月に尺八の音のうねりけり
部活の笛はたと止みたる夕薄暑
大阪のビルの屋上蓮咲けり
鷺一羽ふえし川原の梅雨晴間